

歴博 ぐらしの植物苑だより

第8回 日本の植物文化を語る 6月24日(土) 13:30~ 本館講堂 入場無料

『近世都市江戸の環境史—水と花とゴミ』 谷川章雄 早稲田大学

第92回 ぐらしの植物苑観察会 7月22日(土) 13:30~ ぐらしの植物苑

『植物をめぐる禁忌』 篠原 徹 本館民俗研究系

見どころ 畑 トウガラシ カボチャ ハナタバコ ヤグラネギ

樹木 サンザシ ザクロ アジサイ アマチャ ヒメアジサイ

クチナシ ハクチョウゲ

草本 ドクダミ アサザ スイレン ユキノシタ アスチルベ(園芸種)

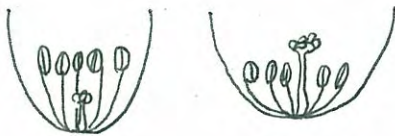
ニワゼキショウ

花の構造をみよう その2 (説明の為に作図しています)

アサザ 異形花柱花

短花柱花

長花柱花



ニワゼキショウ 等花被花

がく片と花弁が同形、同色



植物苑でみられるアサザなどの水性植物

抽水植物 ハス ガマ コウホネなど



浮葉植物 アサザ ジュンサイなど

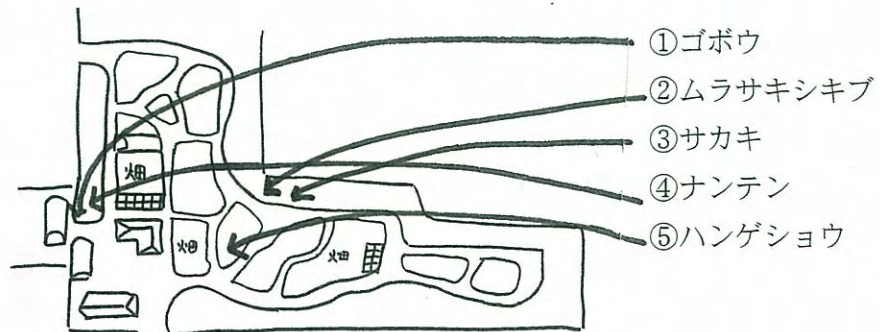
浮遊植物 ウキクサ デンジソウなど



沈水植物 モなど



今週の見どころ



①ゴボウ (キク科ゴボウ属)

長く伸ばした根を食用にする2年生の栽培植物で、主に日本で食用にされている。根には特別な栄養価はないが、繊維が多く、整腸作用・利尿作用がある。苑内には写真の越前白茎ゴボウと山ゴボウで知られているモリアザミが栽培されている。越前白茎ゴボウは若い時に茎の部分を利用する。



②ムラサキシキブ (クマツツラ科ムラサキシキブ属)

山地に生える落葉低木で、花は葉腋から出る柄に集散花序状につく。秋には紫色の果実をつける。種子は果実を食べる鳥により散布される。材は硬く、小器具材として利用される。生葉が寄生性皮膚病に効くといわれている。苑内にはコムラサキもある。



③サカキ (ツバキ科サカキ属)

常緑の小高木で、若枝先端の冬芽は下方の葉腋よりも大きく、先はとがって鉤状に曲がることが多い。花のやや長い花柄は湾曲し、蜂があつまる小さな花は斜め下向きに開く。枝を神事に用いるので神社の境内によく植えられる。榊は賢木とも書き特定の樹種とは限らず、シキミなどを含むことがある。サカキは神の依代や、神事に使われるので、不浄な所に植えたり、船材に使うことも忌まれた。



④ナンテン (メギ科ナンテン属)

常緑の株が叢生する立状の小低木。茎の先端に大きな円錐花序をつける。果実は冬には赤く熟し、果実を喘息、百日咳などの鎮咳薬に、樹皮・根皮を胃病・眼病に効果があるとして用いられる。難を転ずるとして縁起木として植えている。今は印刷された葉が置かれていることが多いが、お赤飯のうえにナンテンの葉を置いていた。苑内には白い実になるシロミナンテンもある。



⑤ハンゲショウ (ドクダミ科ハンゲショウ属)

アジアに1種と北米に1種知られる原始的な植物で、暖地の水辺に群生する多年草。茎上部の、数枚の葉は下半部が白色になり目立つ。半化粧と言われたり、葉が白くなるのが半夏生の頃なのでこの名がついたとも言われます。苑内のハンゲショウは17日頃から白くなり出しました。

農事ではこの半夏生(夏至から数えて11日)までに田植えを終わらせないと、収穫が少なくなるといわれ、農耕作業の区切りの日となっている。

